

新年のご挨拶 「木材を研究することについて」

林産試験場長 松尾 博



平成26年の新春を迎え、皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

なにやら大風呂敷を広げたようなタイトルを掲げてしまいましたが、新春でありますのでご勘弁いただき、日頃より当場の職員にお話ししていますことをご紹介させていただきたいと思っております。

■ホット アンド クール

昨年のご挨拶において、私は、林産試は木を見て森を見る組織でなくてはならない旨のお話をさせていただきました。これは、我々は材料屋であります、研究対象である木材の背景には必ず森林があり、このことを強く意識しなければならないということです。

試験体の向こうには森林があり、我々の研究成果が北海道の健全な森林を支えていく上で重要な役割を果たすようになることが、林産試の研究方向の大きな柱のひとつです。このように、常に森を意識した熱い(ホットな)気持ちで研究に取り組みたい、と考えています。

しかしながら一方では、冷静でクールな視点も必要です。木材は強い異方性を持つ材料であり、その性質は樹種さらには個体間においても差異があります。また、腐る、変形する、割れるなど材料としての大きな欠点もあります。

木材は生物材料だから仕方ない、また、森林を支える大事なものだから我慢して使え、では市場に受け入れられるはずがありません。他の材料に取って代わられるだけです。木材を材料として冷静に見つめ、いかに評価し性能保証をするか、また、欠点を克服し、市場に受け入れられる優秀な材料をどのように開発していくのか常に考えていくことが必要です。

昨年、ある会合の席で、私どもの所属しております北海道立総合研究機構の理事長が、「これまで鉄やコンクリートは血を流すような努力をしてきた。木材はどうなのか。」というお話をされたことがありました。この時、私は、林産試は木材の欠点を克服することを目指す組織ではあるものの、生物材料であるが故の木材研究の難しさを言い訳にしたことはなかったのか、ということ突きつけられたような気になりました。

森をホットに意識すると同時に、森に甘えることなく、材料としての木材の可能性をクールに追求するという姿勢を持ち続けたいと考えております。

■我々は木を選ばない

先日、住宅建設現場の前を通りかかったところ、「道産カラマツ材を構造材に使った家」というのぼりが立ててありました。カラマツ住宅がもはや珍しいものではなくなったんだ、ということに改めて実感しました。

戦後まもなく、北海道の森林は本州向け住宅資材の供給や外貨獲得などの目的で伐採が進み、私有林においては、跡地にカラマツが多く植えられました。強度が高く成長が早い樹種として、炭鉾の坑木や電柱材への早期利用が期待されたのですが、ご存じのとおり、その目論見は大きく外れてしまいました。広大なカラマツ群は早急に間伐を必要とし、またカラマツ材の利用用途開発は、北海道林務行政最大の懸案事項でありました。当時、林産試の重要な課題はカラマツをいかに使うかで、乾燥、製材、加工といった多方面に渡る総合的な研究、技術開発、製品開発等を行ってきました。近年、カラマツ材の成熟が進むなか、行政と一体となった取り組み等により、先にお話ししたとおり、カラマツ住宅が珍しくない時代を迎えようとしております。カラマツ研究は現在も進められており、今までは不可能と考えられていた心持ち正角材の人工乾燥方法が確立し、構造材として実用可能なレベルにまで進化しています。(詳しくは、林産試のホームページ

<http://www.fpri.hro.or.jp/manual/coredry/coredry.htm> をご覧ください。)

さて、北海道の人工林の構成は、齢級構成順ではカラマツ、トドマツ、アカエゾマツとなっています。トドマツ、アカエゾマツは北海道の郷土樹種ではありますが、人工林材の扱いに関しては、まだまだ未知の分野が多く、今後これらの樹種をどう扱っていくか、林産試に課せられた重要な課題である、と認識しております。

これらの人工林は、多くの関係者の努力により築き上げられたものです。林産試は、そのフィニッシュを担当する重要なセクションである、と認識しております。着地が失敗すると、次に飛ぶことはもうできません。我々は木を選ぶ組織であってはならず、木を選ばない組織でなければならないと強く思っております。今後、多くの困難が待ち受けているでしょうが、特にトドマツ、エゾマツの利用開発は我々がやらなければ他に誰がやるんだ、というような強い気持ちで取り組むよう、職員に話しております。多少時間はかかるでしょうが、関係の皆様方と十分連携の上、進めて参りたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

最後は興奮気味のご挨拶となつてしまい恐縮いたします。どうも、私はホット面が優位を占めているようです。冒頭掲げましたホットアンドクールは、自分自身に言い聞かせなくてはなりませんねと反省しつつ、皆様方のご発展とご健勝を心より祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。